

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第105回 (2017.10.3) の要旨

拝読文(『真宗聖典』54～55頁)

等しく三界を観わして、空にして所有なし。仏法を志求し、もろもろの弁才を具し、衆生の煩惱の患を除滅す。如より来生して法の如如を解り、善く習滅の音声の方便を知りて、世語を欣ばず。樂いて正論にあり。もろもろの善本を修し、志、仏道を崇がん。一切の法はみなことごとく寂滅なりと知りて、生身煩惱の二つの余、俱さに尽くせり。甚深の法を聞き心に疑懼せず。常に能くその大悲を修行せる者なり。深遠微妙にして覆載せざることなし。一乗を究竟して彼岸に至る。

「等しく三界を観わして、空にして所有なし」とあります。私たちの感じております世界は、いわゆる科学的知見による見方があるわけですが、三界とは仏教の眼から見た、我われが感ずる世界のことです。それは「欲界」「色界」「無色界」と呼ばれます。私たちが流転している在り方を三界と教えるわけです。その三界を如来の眼で観察すると、本当は「空にして所有なし」ということなのです。空は、スンニャ (śūnya) というインド語の翻訳語のようですけど、実体が無いということです。私たちは実体がある如くに見てしまっていますが、本当はないのですね。所有というのは、所有という意味ではありません。我われが有ると思っているような形でものがあるわけではない。つまり空だということを仏陀の智慧は見抜いたわけですね。

人間が苦しむのは実体があると思って、それを愛着したり、憎んだりする形で我われは世界を感じている。けれどもそういう実体は、本当はないということが、教えを通して分かってくるという面もあるわけです。しかし我われ凡夫は、そういうことをいわれて一応わかった積もりにはなるけれど、やはりその実体観が抜けませんので、愛着したり悲しんだり苦しんだりするわけです。

それに対してこの如来の眼をもった存在は、「仏法を志求し、もろもろの弁才を具し、衆生の煩惱の患を除滅す」と。衆生は煩惱により患えます。人間が本当に智慧を開いて所有欲を離れて冷静にこの世を見れば我われが執着しているものは、みんな実体はないことにブッダは気付いています。ところが、幾らそれを教えても、我われはそういうことは分からない。そこから悩みや患えが出てくるわけです。そのような煩惱を除滅するのが如来のはたらきなのです。

そして「如より来生して法の如如を解り」とあります。「従如来生」という言葉を親鸞聖人は「証卷」に使っておられます。「阿弥陀如来は如より来生して」という。如というのは、空であるということを知ると言うわけです。我われは煩惱の衆生ですから、どこまでも執着して止まない。それに対して一如を覚ったブッダの方から、迷いの世界に出てくるということを知ると、如より来生すると。これを如来というのですね。

如来というと何か我われは、実体観でしかものが見えませんか、如来という仏像みたいなものがあるのだと感じてしまいますけれど、そういうものがあることを言っているのではなくて、真如の智慧を衆生に教える為に迷いの世界に来て下さると。我われの執われている世界に執われを超えた世界からあえて入って来て執われを破るように教えて下さる。

それは「善く習滅の音声の方便を知りて」ということです。習滅するとは衆生のために煩惱を滅する方向を教えたいと。その時に「音声の方便」とあるように仏陀が生きておられる間は音声で、つまり説法で教えを説いた。しかし教えを伝えようという時に、分からない衆生の側に立たないと伝わらない。そこに方便ということが出てくるわけです。仏陀が衆生の心になって衆生の心を解きほぐすような形にしないと分かってもらえないわけです。そこに方便という言葉の大きな意味があるのだらうと思います。転法輪に立ち上がった時には、苦悩の衆生と同感するということがあって言葉を選んだわけですね。そういうところに方便という言葉の大きな意味があるわけです。

「世語を欣ばず」については、世語は、世間関心の言葉です。現代は宗教が消えて無くなっている時代です。ですから宗教を宗教的な言葉で語ったのでは通じない。世間語で語らないと分かってもらえない。しかし世間語は、ようするに欲絡み、煩惱絡みですから、その言葉を用いつつ、智慧の世界に導き入れるのは難しいのです。一つ間違えば世間に転落しますし、浄土や仏などの言葉だけだったら、現代とは関係が無くなってしまいます。

「楽いて正論にあり」。正論というのは、この世語ではない世界を正論と言っているのですね。八正道という言葉がありまして、仏陀が説いたとされています。仏陀が説法を始めて一番古い教説だろーと言われていた教えに八つの正しい道、つまり正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定と八つの正しさということが教えられているのです。それをここでは正論と言われていているわけです。仏陀の願いを言葉に表し、論理づける。これは世語ではなくて正論であるということなのでしょう。

「もろもろの善本を修し、志、仏道を崇がん。一切の法はみなことごとく寂滅なりと知りて」、寂滅とは涅槃の同義語です。ニルバーナ (nirvana) という言葉を翻訳して寂滅とも訳す。寂滅も涅槃、一如はみんな同義語です。一切の諸法はみな寂滅である。しかし、諸法を実体的に見ようとするから、我われの迷いが起こる。

でも、その諸法以外に寂滅の場所もないのです。寂滅というのは、相対的な動転する世界に対する言葉ですが、仏教用語としての寂滅は相対的な静かさではないわけです。動いている在り方を仏陀が見れば静かなのであり、それが寂滅なのですね。仏教とは覚りを開くことにより世界が変わり、救いをもたらすという考え方です。私たちの感じている迷いの世界以外に善い世界があるのではないと。生老病死の苦が無くなる世界が救いの世界ではなくて、苦悩を感じず命以外には覚りの世界はないのです。

続いて「一切の法はみなことごとく寂滅なりと知りて、生身煩惱の二つの余、俱さに尽くせり」とあります。「煩惱に二つある」と言うのは、色々な煩惱がありますが、唯識という教えでは煩惱障というのが先ずあります。煩惱をなくすことを重視するのが小乗仏教の考え方です。しかし煩惱をなくせば救われるかという、そこにもう一つ分別するという問題が起きてきます。これを所知障というのです。知られる障り、知らるべき障りですね。つまり煩惱が起き、そのまま障りになるのが、煩惱障です。煩惱障は、我われは強く障りと感じます。けれども教えを通して気付かされないと障りとも思えないような障り。そういう障りを所知障というのです。

「二つの余」というのは、余習といえますか、余塵といえますか、火事は焼け木杭に火がつくということがあっても、火のなごりがあるとまた燃えるでしょう。だから、煩惱を消したように見えて、表向きの煩惱は消えても、生きている限りは起こった煩惱の熏習、香りが残るのです。

二つの余というのは、煩惱に二つの煩惱があって、その余、これは二つの習気ということなのですね。はたらいっている煩惱とその煩惱の結果である習気の、それを「俱さに尽くせり」両方共に尽くすというのです。

「甚深の法を聞き心に疑懼せず」、はなはだ深い法を聞いて疑いや怖れが生じない。疑懼というのは、疑いと^{おそれ}か懼れですね。そういうものを生じない。

「常に能くその大悲を修行せる者なり」と。人間は大悲を起こせません。小悲、小さい慈悲だけです。有縁の慈悲ともいわれるように、縁があったら起こすのです。縁があって起こすことができるような有縁の慈悲を小さい慈悲といいます。如来は大悲、無縁の衆生を救うと言われています。我われ凡夫からすると無縁の衆生、つまり縁のない人間を救うなどということは関心が起こらないのです。人間の慈悲というものはだから限界があるから、小さな慈悲なのだということです。

如来は限界を設けない、大悲だと。如来が限界を設けないのは、この世的な形での慈悲ではないからです。つまり苦悩している衆生の意識改革をしようというのが慈悲の形だからです。我われの有縁の慈悲は、もちろん精神的なものに対する同情も起きますが、物質的な困難に対する同情が強いですよね。それを何とかしようとするとしても限界があるわけです。

大悲というのは、だから如来の慈悲であって我われ衆生は大悲は起こせない。ただこの場合、如来の大悲を修行する。これはどういう意味かなと考えると、親鸞聖人が常行大悲の利益ということを中心に信じて言いますね。常に大悲を行ずる利益が与えられると言います。親鸞の場合、この大悲は、明らかに本願の慈悲、つまり法蔵菩薩の慈悲、あるいは阿弥陀如来の慈悲のことです。これを行ずるとは、自分が大悲を信ずるということにおいて、大悲が行ずる。自分が大悲を行ずるわけではなく、自分に大悲が照らして下さることを感じて生きている。必ずそのことをまた聞いて下さる方があり、伝えて下さる方が出てくる。そういうことが、大悲が伝わっていくということでしょう。人間が大悲を伝えるということはできません。大悲は自分から、衆生に呼びかけて来るわけです。一人ひとりが大悲に触れて、大悲に値遇して、かたじけないといたいて下さる。そういう縁を我われは開いて行くことはできるけれど、それに出遇うのは、一人ひとりですね。「大悲を修行」と言えば、一般的には有限な人間が大悲を自分で行ずることができるのだと思い、修行する。そのように読んでしまいます。

でもこの一段は、浄土に生まれて、そのことによっていただいた利益を、衆生の側に戻って来て伝えると。つまり第二十二願の内容として言われているのです。浄土の功德を言っているのです。そして因位の法蔵菩薩が阿弥陀如来の果の力をいただいて、もう一回こちらで仕事をして下さるというような形の文面です。そういう意味での菩薩の仕事ですから、大悲を修行するということが言われうるのだらうと思うのですね。

「深遠微妙にして覆載せざることなし」。^{みみょう}微妙を「みみょう」と読んだ場合は、微妙にして妙であるということです。鈴木大拙先生は、微妙ということは wonderful と訳したそうです。Wonderful ということは、素晴らしいと。素晴らしいということは、我われからすると不可思議だというような意味ももっているわけです。英語で言っても wonder には疑う意味があります。「みみょう」と読んだ場合は考えることが難しいという意味ももっているわけですね。

「覆載せざることなし」とは覆ったり、載せたりしないことはない。覆うという場合は、雲がこの世を包むような形だし、載せるというと大地が衆生を載せるようなイメージだし、結局、この対象は衆生なのでしょう。衆生を覆ったり、支えたりという、そういうことが覆載という形で言われているのでしょ。

「一乗を究竟して彼岸に至る」と。大乘仏教に来たって、一乗ということが言われるようになりました。一乗ということは、あらゆる衆生を平等に乗せることができる乗り物という意味です。だから大きな乗り物という考え方もあります。だからこの一乗というのは、一つに絞られるわけです。それで『法華経』などが法華一乗という場合は、『法華経』のみが真実教だと言うわけですね。

でも、一乗という意味は、一といっても、数の一というよりも、全体が一だということです。普遍的という意味の一です。全体を載せるような乗り物、これを一乗というわけです。

「一乗を究竟」するということ。源信僧都が書いておられる『一乗要決』という、一乗を解明した本がありますが、その結びに究竟一乗という言葉があります。一乗を究竟するという課題を突き詰めて行って、源信僧都自身はそう書いているわけではないのですけれども、親鸞聖人は最終的には誓願一仏

乗とおっしゃいます。誓願、阿弥陀の本願、大悲の本願こそが一乗だとおっしゃいます。

大悲の誓願ということは、我われはどこまでも愚かな、そして心の暗い、煩惱具足の凡夫だと。煩惱具足の凡夫を残すところなく包んで下さるものが誓願、誓願ということは、十方衆生がたすからないなら自分は仏にならないと誓うわけですから、そういう誓いを成就して自分は最後に仏になろうと。こういう誓いが誓願ですから、その誓願の前に一乗が成り立つと。こういうのが親鸞聖人のお考えですね。

ここに「彼岸に至る」とあります。彼岸に至るということは、彼岸に生まれる。浄土に生まれることでもあるわけですね。浄土に往生する。こういうふうにして彼の岸に渡ることができる。

しかし、死んだら浄土に往けるという保証はどこにあるかという話になると、仏教の話でなくなるのです。仏陀が教えようとした内容としてどういう意味かといったら、悲願を建てるということは大慈悲から来ていると。大慈悲は衆生に苦悩を感じないような、一如の世界を教えようとするわけです。

その時にこの世で凡夫として苦悩している衆生と、如来が覚りを開いて呼びかけている衆生と、そこに質の違いがあって、それでそっちの世界に願生という形で呼びかける。このことを親鸞聖人は大事な課題とされたのです。

文責：田村晃徳（親鸞仏教センター嘱託研究員）